慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	菊地昌典著 ロシア農奴解放の研究 : ツァーリズムの危機とブルジョア的改革
Sub Title	
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.1 (1965. 1) ,p.81(81)- 82(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19650101-0081
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650101-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うルート」を通じて、「相対的安定」期の世界資本主義が再編成され、「二〇年代につくられたこの前提条件があったからこそ、アメリカに端を発した恐慌が、アメリカ対外投資の減退と停止とを衝撃の契機として、世界的規模の恐慌となった」（四〇頁）という国際金融、そのアメリカ国内的現象としての株式ブームの構造、金融政策及び国際収支関係の分析、といった金融機能的分析視角と、自動車、建築業、鉄鋼業及び農業並びに電力その他の公益事業といった二〇年代及び大恐慌において主要な役割を演じた産業諸部門の部門別構造分析の視角であるといえよう。したがって、単に恐慌研究にとどまらず、アメリカ主要産業の構造分析という点でもすぐれた成果をあげているのであるが、編著者自身、告白されているように、編著者の前記問題意識からすれば、「問題の解決に到達する以前の段階で、問題の提起をなしたにすぎない」。金融的機能分析視角と構造分析視角という、それ自体極めて正しい両視角からするこの「大恐慌の研究」が提起された問題をどのように解決・収斂してみせるかは、なお今後の諸研究に待たねばならないであろうが、それがためには、なお、もう一つ、社会主義体制生誕の必然性、世界資本主義の体制的危機の視角が不可欠であるように思われる。

ともあれ、同一の研究目標のもとに、目標の達成に必要な独立の諸テーマをそれぞれ追求することによって、両大戦間およびその前後にわたるアメリカ資本主義経済について、新鮮な学問的財産を提供したものといえよう。（東京大学出版会・A5・五五八頁・一八〇〇円）

—常盤　政治—

＊　＊　＊　＊

小泉　仰著

『ミ　ル』

これは「世界思想家全書」の一冊で、J・S・ミルの思想を、倫理学の立場から解明したものである。

先ず著者は、ミルの生涯についてその思想を点描、彼の倫理学を、メタ倫理学の立場から再検討し、それによって、われわれが行動の規準としている素朴な功利主義に反省の光をなげかけ、現代倫理学界の問題の所在を示し、客観的な態度をとることを期待する。（第一章、緒論）

いうまでもなくミルは、ベンサムの功利主義から出発し、しかもベンサムとは異って、快楽を量と質の双方から考え、満足した豚よりは不満足なソクラテスの方を撰んだ。著者はこの功利主義の説明について、ミルの証明は弁護士の弁論と同じく不完全ではあるが、その証明はミルの人生経験全体をとおしてつちかわれ育てられ確信の域にまで達した人生観（功利原理）を弁護する理由を提出することであり、人々の理性に訴える点で合理性をもつとこれを擁護している。（第二章、ミルの倫理学体系）

以下、その内容を追うと、

現実の社会制度や規則に功利主義を適用するための、平等の原理について、ミルは平等の原理は外にある結果（extrinsic consequences）、社会的功利性を考え、正当な平等と不当な平等を区別した。これに対し、自由の原理には知性活動に関する限りそのものに価値があるという、内にある結果（intrinsic consequences）が認められ、外にある結果の価値しか認められなかった平等よりは、一段と高く評価された。（第三章、平等と自由）

このような功利主義が具体的問題に適用された時、ミルの姿勢はさらに明らかとなる。彼は労働者階級が一般にうそつきであると述べ、彼らの知的・道徳的改善を望んだ。そして熟練労働者には参政権や企業参加を認めつつも、未熟練労働者は雇用労働者の地位をしめるだけとした。また選挙について、民主主義を期待しつつも多数者の支配を危険とし、複数投票制を提案した。また女性についても、彼女らがしいたげられている原因を社会の伝統や慣習に見ながらも、ミルが男性の支配から解放させたいと望んだ女性は、おもに哲学、科学、芸術において優れた能力を発揮できる素質をもつものだけであった。（第四章、功利原理の適用）

そしてさらに第五章においてミルの宗教について解明、第六章において文献の紹介がおこなわれている。この書は、ミル研究の入門書というだけではなく、倫理学の立場から照明をあて問題の所在を示しているので、ミルについてある程度の知識をもち倫理学に関心を寄せる人には一層興味あるものであろう。ただしミルの思想はもちろんこれに尽きるものではなく、経済学、政治学、社会学、論理学など多方面にわたっているので、各分野の研究書を併読することが望ましい。たとえば功利主義を正面から扱っていながら、そのブルジョア性について全く触れていないような点は問題である。こういう点については、もっと当時の市民社会の問題性について検討することが必要であろう。ミルを倫理、または論理の次元で見るだけではなく、ミルの影響が今日でも大きいだけに、根本的な批判、克服を期待したい。（牧書店・一九六四年五月刊・新書版・一五七ページ・二五〇円）

—白井　厚—

＊　＊　＊　＊

菊地昌典著

『ロシア農奴解放の研究

——ツァーリズムの危機と

ブルジョア的改革』

一八六一年三月五日に発布されたロシアの農奴解放令は、ロシア近代化の第一歩として有名である。特にその後のロシア近代化の過程が、一九〇五年の革命を経て、一九一七年の二月革命、一〇月革命を生起せしめ、現在の社会主義体制にまで到ったことを考えると、ロシアの農奴解放は実に多様な問題点を含んでいるといわねばならない。従来我が国の外国経済史研究が西ヨーロッパに限られ勝ちであり、ロシア経済史の研究は、小林良正氏や増田富寿氏の先駆的労作によって行われてきたに過ぎない。その意味で今回菊地昌典氏によってロシア農奴解放の専門的研究が発表されたことは、我が国学界にとって実に喜ばしいことである。

ところで本書の第一章は、従来のロシア・ソヴェト及びヨーロッパ・アメリカの研究史の概観に当てられている。そして農奴解放の不徹底性から農奴解放の歴史的意義を全面的に否定する立場や、農奴解放の人道主義的評価からこの解放を無条件に肯定しようという立場の双方を戒めている。そして著者自身は、農奴解放があくまでツァーリズムの主導によって行われた上からの反動的改革であるとみると共に、この改革の結果、ロシア独特の資本主義的発展が急速に開始せられたという意味で、解放はブルジョア的性格をも兼ね備えていたとしている。このような著者の立場は、ロシア革命の偉大な指導者レーニンのそれと略一致している。

さて著者は以上の基本的立場に立って、豊富な史料や基礎的文献を渉猟した結果、第二章以下の極めて実証的分析を展開する。

第二章「農奴解放の歴史的前提——領主経営の実態と矛盾——」、第三章「農奴解放の国際的＝国内的契機」、第四章「農奴解放の準備過程」、第五章「農奴解放の実施過程」がそれである。

第二章においては、農奴解放の主体であった特権的閉鎖的世襲貴族の農奴支配の実体を浮き彫りにした上で、十九世紀半ばの農奴制

下の農業生産力の水準の測定を実証的に行う。そして、領主直営地においても播種量の三倍強という西欧諸国と比較した場合、驚くべき低位の生産力であることを指摘する。そしてツァーリ官僚の一人が書いた調査報告から、体制支配者の側にも、こうした低位生産力の原因を農奴労働力の非能率に求める声があがっていることに着目する。そして地域毎に様々の形で行われている農奴支配の実態を示し、領主財政の浪費的性格と農奴制支配の非生産性の矛盾のうちに、上からの農奴解放の原因をみている。

第三章においては、ツァーリズムと貴族をして農奴解放へと飛躍することを直接決意せしめた契機として、トルコ市場の国際的争奪戦によって起った英仏とロシアの間のクリミア戦争とその敗北をあげる。そしてこの敗北は、単なる軍事的敗北としてではなく、進んだ資本制社会の軍隊と遅れた封建制社会の軍隊の優劣の問題として、ロシア国内に深刻な危機感をよびおこしたのである。その上ツァーリズム国家の財政危機も加わり、ここに支配階級の内部分裂と農民一揆の続発から、農奴解放が必然化して行く。

第四章においては、こうした背景の下に一八五六年三月三〇日のツァーリ演説以来、農民問題秘密委員会、県貴族委員会、ロストツェフ議長の下での第一期法典編纂委員会、パーニン議長の下での第二期、第三期法典編纂委員会、最後の総委員会、国家評議員と各種の委員会によって準備され、結実して行ったロシア農奴解放の過程が分析される。そしてこの過程で官僚中心のリベラル派と、地方農奴所有貴族の保守派が、屋敷地と農地の買戻し（部分的有償解放と地主の土地収奪をめざす）と、農民の義務負担と共同体維持の問題をめぐり、様々の形で論争を展開し、最終案へとまとめられて行くにつれて、苛酷な土地収奪の実質をもつ農奴解放の方向が明確となる事情が明らかにされる。そして農奴の憤りを慎重に計算し、彼らの立ち上りに対する弾圧機構の整備まで行った上で行われたのが、一八六一年三月五日の農奴解放令の公布であった。

第五章ではかくして実施された農奴解放は、支配階級内部でのリベラル派に対する農奴主の完勝をもたらし、後者の主導の下にロシア資本主義が展開して行くこととなる。農奴解放の直接的結果は、僕婢的農奴の土地無解放、零細自作農の創出等であった。

さて以上の重量感溢れる実証的研究は、農奴解放実施の必然性を解明し、解放そのもの

の不徹底性のうちにロシア資本主義の独自性を見出し、さらにそこから一九〇五年或は一九一七年の革命の必然性をみて行こうという著者自身の問題意識の史実による検証の成果である。ただ我々のような門外漢にとって知りたいロシア農奴制の構造、特に農奴把握の実態については、余り十分な紹介がなされておらず、そのため、何故ロシアにおける農奴解放が、下からのものではなく、上からのそれとして終ったのか、また何故上からの解放に対する農民の抵抗が消極的となってしまったのか等の疑問には、納得の行く回答は本書中には見出しえなかった。ツァーリズムと貴族の専制的支配や警察権力の弾圧は、それに対する十分な理由とはいえないように思う。そうした事態を可能ならしめたものを追究することを、我々は著者やロシア史研究者の今後に期待したいと思う。我々はそこで当然、ロシアの村落共同体ミールやこれに対する貴族の支配のメカニズムの解明をも期待しているのである。（御茶の水書房・A5・四八九頁・一八〇〇円）

―寺尾　誠―